

【郵便振替】 01170-1-81313
【E-mail】 contact@oisp.jp (12/1より)
【Home Page】 <http://www.oisp.jp/> (同)
【Net Forum】 準備中
【代表者】 山本 晴義 (校長)
【発行者】 平等 文博 (運営委員長)
【編集者】 平等 文博

「現代アメリカ思想」の現在

山本 晴義 (校長)

『対話・現代アメリカの社会思想』(ミネルヴァ書房)を出しました。ここで私自身の戦後の思想の歩みをふりかえって、大変重要だと思った点を三つほどあげておきたいと思います。

(1) 一つはグラムシが『獄中ノート』の中で1934年に主張している「アメリカニズムとフォーディズム」です。グラムシは、その頃ソ連中心の「世界共産党」=コミンテルンが世界の資本主義の「全般的危機」を唱え、国家権力の奪取、プロレタリアートの独裁を主張していたのに反対して、「市民社会」における大衆の粘り強いヘゲモニーの確立を説いたのです。後進国ロシアで起ったロシア革命のような「機動戦」に対して「陣地戦」を主張したのです。

戦後、日本でも「マルクス主義」者達は、このグラムシの主張の歴史的な意義を長い間理解することが出来なかった。ほとんど1991年のソ連崩壊まで「コミンテルンの」な考え方が支配していました。この点については私は拙著「現代思想の稜線」(勁草書房、1994年)で検証しています。

(2) 第二は「1968年革命」の問題です。ハーバースは1989年のベルリンの壁崩壊を68年の「遅ればせの革命」だと言っていますし、ウォーラースティンは89年を68年革命の「余震」だと言っています。

60年代、アメリカでは公民権運動、スチューデント・パワー、カウンター・カルチャー、ベトナム反戦、ラディカル・フェミニズムや消費者運動、反公害、環境保護運動など多様な運動が爆発しました。しかもアメリカだけでなく、フランスでもドイツでもイタリアでも日本でも、そして第三世界でも国境を越えて噴出しました。

それはまたスターリン批判、ハンガリー事件や「プラハの春」など、既存の国権主義的な社会主義国や「旧左翼」に対する「異議申し立て」でもありました。「コミンテルンの」な「唯一前衛党論」は崩壊し、「複数党派のネットワーク」が台頭しました。また今まで政治と言えば、もっぱら「国家」あるいは「階級闘争」をめぐる問題(「政治革命」)だと考えられてきたのが、社会のさまざまな領域で、いわゆる「ライフスタイルの政治」、日常生活における意識や価値観の変革の問題(社会革命)が発展しました。

最近アメリカを中心とするグローバリゼーションに対抗してシアトル(1999年)やメキシコのカンクン(2003年)でWTO閣僚会議反対の運動が、ブラジルのポルトアレグレでNGOによる「世界社会フォーラム」の運動(2000—3年)が、そして今年二月十五日には、1000万人におよぶイラク反戦運動の高揚がありました。私はこの多様な、地域、国家、人

種、性差、文化を越えたグローバルな運動の起点は「1968年」にあると思います。

(3) 1991年、ソ連が崩壊しました。アメリカ極支配のグローバリゼーションが拡大しました。それまでの米ソ対立、東西冷戦の関係に代わって第三世界、地域紛争、南北関係が前面に出てきました。

現在、私はウォーラスティンが言うように近代世界を「近代世界システム」として捉え、中核と周辺、半周辺の有機体として見る視点が重要だと思います。9・11以後、私は欧米中心主義的

な「近代世界システム」が、道徳的にも文化的にも激しい混乱と危機に見舞われているのを感じます。いま私たちが「新しい世界システム」をつくっていかうとするとき、今まで依存してきた欧米中心主義的な諸前提を相対化し、「周辺」、「ポストコロニアリズム」の視点をも包摂していく必要があると思います。この点、先日亡くなったポストコロニアリズムの知識人、パレスチナ出身のコロンビア大学教授、エドワード・サイードの闘いは私たちに大きな示唆をあたえてくれます。(2003.10.15)

山本晴義『対話・現代アメリカの社会思想』

出版記念会&祝賀会

山本晴義校長の新著出版を記念し祝賀する会を、10月25日(土)に尼崎崎労福祉会館にて開催しました。記念会では、山本校長の記念講演のあと、木村倫幸、やすいゆたか、田畑稔の三氏からそれぞれ同書に対する忌憚のないコメントをいただき、祝賀会でも20人余りの参加者全員が、代わる代わる山本校長の今後の研究活動に対する期待と注文を述べました。また、当日所用で参加いただけなかった多くの方からメッセージをいただきましたので、その一部をご紹介します。(本書を割引価格にてご購入いただけます。詳しくは13頁の案内をご覧ください)【編集部】

「アメリカ」を深部から理解するために

松田 博 (哲学学校講師、立命館大学教授)

お知らせいただき早速書店に注文したのですがまだ入手しておりませんので、御新著の感想を述べることは出来ませんが、山本先生がこれまで発表されました論文や対談は愛読させていただいておりますので、御著の方も我々後進の者に多くの刺激と教示を与えていただける充実した内容と拝察しております。

皮相なアメリカ論が多いなか、アメリカ社会をその深部から理解するには、アメリカ社会思想の理解が不可欠と考えますが、御著によってアメリカ社会思想を理解するための貴重なヒントが与えられると思います。

第二に、アメリカ知識人の知的な闘い、文化的ヘゲモニー闘争についての見取り図が提示されるという期待です。ちなみにウォーラスティンは今月メキシコで開催されたIGS(国際グラムシ学会)にはじめてゲストスピーカーとして参加して

おります。惜しくも先月亡くなったサイードもIGSの会員でした。

第三に、グラムシの「アメリカニズム」に関する「ノート」は未完の「ノート」ですが、現代のアメリカニズムを深く分析するために御著は貴重な示唆を与えていただけるものと確信している次第です。

私は、学生時代に先生の「プラグマティズム」に関する著作を読み、後年グラムシの「獄中ノート」の研究にたずさわるようになりまして、グラムシが重視したプラグマティズムの意味について考える際に、先生からいただいた助言が大いに参考になりました。

先生の益々のご活躍を祈念いたします。

2003年10月15日

衰えぬ「学問への情熱と志」で更にご活躍 を

山本先生、御著書はせめて10月24日迄に読了したいと考え、長年取り引きしている書店に発注しているのですが、まだ届きません。小さな書店もなかなか経営が厳しそうなので、何でもその店で求めるように心がけています。

山本先生の数々の御講演で、私はこれまで沢山、恩恵を頂いております。

先日、E.サイードが逝き、ブッシュのアメリカがとても変だと思えるので『十字軍の思想』(ちくま新書)とかコツコツさぐっては居りますが、私の狭小な身辺も、色々なことが起こり、どっと

メゲそうになった或る日、通りすがりの古書店でふっと手にとった百円也の一冊、新潮文庫『中国の思想』吉川幸次郎著に出会い、思いがけぬ所で勇気を取り戻し、肝がすわってゆく自分を感じる今日です。

老人が老親の介護に疲れ果てる状況が、私の周囲の知人にあまたあり、先生の「学問への情熱と志」の衰えぬ御姿は、先生ご自身も私共迄も倅いと存じます。

山本先生ありがとうございます。今後も更にお教えくださいませ。(2003.10.24)

夏期合宿報告

木村 倫幸 (参与)

夏恒例の合宿が、8月30日から31日まで、信貴山の玉蔵院で元気に開催されました。季報『唯物論研究』刊行会・大阪唯物論研究会哲学部会との共催で、夏休みの終りの忙しい時期にもかかわらず、17名の皆さんが参加されました。その模様を次に簡単にお知らせします。

第1日目は研究発表で、まず室伏志畔さんから「古代史像の揺らぎ——70年代以後の展開と現在」と題する報告がありました。ここでは「幻想史学」の視点から、戦後史学の問題、中でも『日本書紀』の幻想性をどう解体するかという問題が論じられて、記紀の枠内での歴史解析の時代(戦後文献実証史学)は終って、今後どのように東アジア史に結びつけるかという点が強調されました。

続いて、木村が「徐京植とプリーモ・レーヴィと分断の意識」という報告を行いました。アウシュヴィッツ収容所で生き残った作家、プリーモ・レーヴィの提起した問題——想像を絶する体験を伝えていくこととその過程であらわれてきた社会との断絶、分断の意識の問題——をどう考えればよいのか、また日本社会においても、戦争責任、特に元「慰安婦」の証言をめぐる問題でこの意識が存在していることを指摘し、批判し続けている徐京

植の問題提起が報告されました。

当日夜の交流会は、アルコールも入って、みなさんの近況報告を中心に大いに盛り上がりました。消灯後もなお夜遅くまで議論を続けた元気な人々もいました。

2日目は、6:00に起床。伊元勇さんの指導のもと、昨年からスタートした早朝ヨーガ教室(クリヤー・ハタ・ヨーガ)が開催され、「礼拝」「肩立ち」などさまざまなポーズを、それぞれなりに試みました。また今年は、呼吸法の指導もあり、瞑想の落ち着いた気持を体験することもできました。

朝食後しばらく境内散策、続けて伊元さんの講義、「近代スピチュアリズム」が行なわれました。「霊性運動」の説明は、哲学学校で日頃議論している思想とはまた異なる視点を与えてくれました。

その後、午前中は、特別に神奈川県から参加された、「生活クラブ神奈川」の理事長である大嶋朝香さんから、「社会をつくり、変える『大ぜいのわたし』」と題して、「生活クラブ神奈川」の30年にわたる活動と、その特徴についての報告がありました。ここでは、組合員主権に基づいた参加型の生活実践という視点からの生協活動をさ

らに進めて、地域コミュニティの自律と再活性化を図っていくという新たな展望の可能性が紹介されました。

午後は、環境問題に焦点を合わせて、服部健二さんから「環境世界の間学的構造とエコロジー問題」という題で、自然と人間との関係あるいは自然の問題を、構造的な生命としての人間の交渉、振舞いの仕方に着目して(K.レーヴィットの見解を手がかりに)考えていくという報告がなされました。そして「共同世界に対して振舞いながら環境世界に対して関わり、環境世界に対して振舞いながら共同世界に対して関わるという人間の存在の構造に関連に、自然の再生産を目指すエコロジー的倫理規範が立てられなければならない」ことが強調されました。

これに続いて、地元琵琶湖で水環境問題に関わる運動をされている小坂育子さんから、「琵琶湖・

水環境の変遷」が報告されました。そこでは、「水と文化研究会」が、ホテルの生態を10年間調査した成果(ホテルダス)や、「水環境カルテ」、「聞き取り」で見えてきた「水の使い回し文化」など興味深い事例が紹介されました。これを通じて、自然と人とのかかわり、生活との距離について再度考え直すことの重要性が指摘されました。

このように今年の2日間の合宿は、時間的余裕を心配したほど、最初に計画したときよりもずっと盛りだくさんの内容となり、久しぶりにお会いした懐かしいお顔とさまざまな議論を残して、あっという間に終了してしまいました。またこの合宿でいろいろとお世話をしていただいた参加者の皆さんに心から感謝する次第です。では来年の合宿にも多くの方々が参加されることを心待ちにしております。

運動と『情報の流れ』についての仮想的考察

～関西イラク民衆法廷とその運動環境～

小橋 一夫 (会員)

(前提)

市民運動というものをコミュニケーションの一形態と考えるとき、情報の「原産・加工と、その伝達」の在りかたで、その市民運動を特徴づけることができる。

イラク民衆法廷は、そのことを自覚し、自己形成しようとしているため、運動形態としてみても際立った「固有性」を獲得する可能性があると言える。

(定義)

まず『関西イラク民衆法廷』という名称を字義どおりに解釈してみる。それは単純に「関西」「イラク」「民衆」「法廷」という各部から成るわけだが、これらはコミュニケーション形態の分類上、決定的な「特性」を意味している。

- ・関西 ……情報処理の場の空間位置の規定。
- ・イラク ……情報ソースの空間位置の規定。
- ・民衆 ……情報処理主体の規定。

・法廷 ……情報処理方式の規定。

「イラク」「民衆」「法廷」が選定されるのは、この市民運動が『反戦平和運動』であるならば自然に思える。

もとより反戦とは、一般には「既に起きてしまった戦争への対抗」であるために、運動主体は当初より、自ずから「時空の規定」への主導権を断念しなければならなくなる。すなわち、どの地で、いつ『戦争』を行うかは、『為政者』の為政者としての“決定”なり、そこに反映されているはずの強弱の“恣意”に委ねられると形容できるからには、対抗運動サイドは『彼ら』が選んだ「その地」を、(逐一)無条件に問題にしなければならないのである。

そしていまイラクが語られるのは、この度の侵略対象国が“たまたま”イラクであったため、さらに「第一義的には」本稿が綴られている時点での『最新の戦争』が“たまたま”イラク侵攻だったからということなのであり、そして、その「イ

ラクでの派手な現象」に『機の熟した』活動家資質が“たまたま”吸着され、親「イラク民衆」運動を立ち上げてゆく、そのさまが傍観されようが、じっさいには果たしてそうか。

ここで“たまたまイラクだった”というとき、むしろ政治力学的必然性は一切捨象されている。予備知識など無く「人間への不殺生」の思いだけで運動に参入した、いわば『純粋活動家』とも言うべき存在がもつ視点を想定すれば、否、それ以上にイラクの当の民間被害者の多くにとってすれば、戦争と「その地」との関わりが、偶然とまでは言わないまでも、少なくとも『戦争責任者の都合』に過ぎなく映ることは容易に推察できる。したがって「イラクでの」戦争を、他の戦争から明確に区別された位置づけをもたせえない限りにおいて、運動サイドがイラクを語ること、のみならず“旬”としてイラクに接し、そのまま語ってしまうに留まらず、執拗にイラクを追いもする場において、しかし、それでも「イラクそれ自体」には、さほどの意味は無いとすら言えなくもないのである。(恐らく戦前には被害者の誰もが(再び)イラクと戦争とを結びつけたくなかったのではないか)

むしろ、量産態勢とすら見紛う、続々と引き起こされる「具体的戦争」や「戦争法制可決」ごとに予先を変え、結果的に「振り回される宿命」を負った『反戦運動スタイル』を脱すること、言い換えれば、或る一つの「匿名の戦争」に敢えて執着しつづけることで「或る平凡な戦争のもつ」深い内容をもって「或る平凡な戦争ですらもつ」深さを証明してゆくような『平和運動スタイル』を志向するというところに重みがあるのかもしれない。

それはまた、同時に、逆のことも意味する。

イラクで破壊された全てを考えるとときには、過去のイラクの保有していた全てのもの、まさに『被害地』のもつ「イラク性」に密着する必要が生じてざるをえない。被害を語りながらイラクを語る、そういう意味では被害サイドによって「署名された戦争」であるとも言えるのである。

そして、喪われた権利の総体であるところのもの、全ての命、全ての財(積み上げた文化をむしろ含む)をおしなべて言えば「イラク独特」の

“権利の分布”(どこに誰が住み、どこに庭が有り、何と何が植わり、どこから知人への小路が伸び、どこに職場である森や工場が有り、学校が有り、誰の友だちだった犬と猫と、家畜がそのときどこに居たかの関係性)が既にそこにあり、しかるにそこへ、或る分布をもった攻撃(いつ、いかなる天候にあったどの方面をどんな編隊が何度にわたり、各々いかなる兵器を提げて到着ののち、どれだけの量、どれだけの時間をかけて、何を目標に、どう被害を予測し、じっさいにはどの方向に投下、つづけてどの範囲を空襲し、結果として何と何とに破壊・損傷、重篤な症状、深刻な作用を及ぼし、どのような心身の衝撃と苦痛を繰りひろげさせ、誰が驚愕し、救出・搬送・治療・看護・介助・物資の供給に当たり、誰が、どのような家族環境・経済環境・身体状況で誕生・成育し、誰と誰が、持続的労苦を余儀なくされ、さらに劣悪となった自然環境・社会環境で多様な悪循環を派生させ、直接にも悲嘆を繰りひろげさせられ、誰が人生を見失い、自暴自棄と2次的な疾病や、そもその急激な孤独に追いこまれたかという意味限定つきの行為)がなされたと捉え直すことができる。

もちろん、そうした時間的な広がりをもった軍事行動の分布様態が如何に「アメリカ的」であるかが、いまここで問題なのではない。

それにまた「戦略に基づく細やかな意図の変遷」(予期せぬ反撃による一時的退却と反抗、進軍)や「手段の乱れ」(誤爆による自損)といった事例が少なからず有ったとしても、コミュニケーション的に閉ざされた「軍事機密」に属し、市民運動主体(市民)が「旧来の手法」を駆使したところで、そうした米軍の多くを知ることはできない。

たとえ米兵が犠牲になっていることを斟酌しても、まずは軍というフィルターを通さない被害者の叫び(別の目的・流路をもった情報の流れ、目撃情報、体感情報、伝聞情報)が、否応無く過去の“良かった頃”のイラクを垣間見せながらの困窮するイラクの現状、裏返せば“なぜか”そこに不在の、物と物と物と……、人と人と人と……、意味と意味と意味と……、まさに「喪われたイラク」という個別的具体的イラクをより詳細に物語ると言えるのである。(そして、それを拾い尽くす調査と“拾い上げる事実認定”とによってこそ、起訴状は形づくられてゆきうるのだ)

人間論への招待

やすいゆたか(会員)

私のホームページの掲示板で、ロボットも人間かどうかで議論がありまして、それで興味をもたれて、大阪哲学学校でやすいさんのもう30年以上やっている人間論を話して欲しいというご注文をいただき、大変喜んでます。ロボットが人間ではないという人には、人間というのは人科の動物で、身体的な個人だという定義があるのでしょうか。これは変えられないと思込んでおられるのです。そうしますと人科の身体的な個人でないものを人間だと言えば、そういう議論は間違っているに決まっていることになります。

しかし「人間」と生物学的な「人」とは、人間論では区別して考えるのです。猿のなかの霊長目の人科の動物が人間になったのは、地球上のことです。他の星では、どういう種類の生物が進化して人間になっているかは分かりません。手塚治虫の『鳥人大系』という名作では、鳥類の頭脳が進化して鳥が人間になるわけです。もし宇宙人との遭遇という事態がおきますと、その宇宙人が猿から進化した人である可能性はほとんどないでしょう。

そうしますと人間は、高度な知能を持ち、理性的な思考力を持った存在だということになります。その場合に、いわゆる生物学的な範疇には入らない、自己意識を持ち、理性をもつロボットと遭遇することがあるかもしれません。そのロボットは理性的に物事を考えるうえに、喜怒哀楽の感情ももっているとします。そうしますと素材が細胞から出来ているのか、複雑な機械装置の組み合わせで出来ているのかに関わらず、ロボットも人間だと認めざるをえないのでないでしょうか。

果たしてロボットが自殺できるだろうか、という質問もありましたね。現在のロボットは自己意識もありませんし、感情表現も機械的です。しかしそれはまだ未熟なロボットでして、やがて何百年、何千年か先には、ロボットも見た目では我々と同じような感情表現が出来るようになる可能性はあります。喜怒哀楽が起るメカニズムが解明できれば、それをロボットに装填できることは考え

られます。

しかし人間は機械ではない、ロボットは機械である。従ってロボットは人間ではないという論法も成り立ちます。その場合「機械」という言葉の意味が問題ですね。種の増殖と個体の自己保存を図るように構成されている自動装置を生物の定義とすれば、動植物や人間も機械だということになります。デカルトは動物機械論を唱えました。でも言語を使って考えることはできるのは人間だけだから、人間は動物機械である身体に神が魂を置き入れたものだと、心身二元論を説いたのです。ホップズは、言語を使った思考を身体機械の機能として見事に説明して、人間機械論を展開したのです。

予め機械から生物体を排除しようとするれば、「人為的に作られたものではない」という規定を生物に入れることになります。しかし人為的につくられたかどうかで人間であるかどうかが決まるとすれば、何故わざわざそういう差別を設けるのか問題ですね。まさかロボットは人間が作った機械だから、たとえ自己意識があり、素晴らしい精神をもっている、人権を認める必要がないということはないでしょう。それは肌の色による差別、出自による差別と同じです。

人格も持っている存在は、それを人間に含めるかどうかは別にして、互いに尊重しあうべきであると言えます。その上で人間を生物に限定したり、無生物のロボットを含めたり、「人」という動物に限定したり、鳥でも人格を持てば人間だとするのは、定義の問題ですから、各自の人間観によるといえるでしょう。

それでは人間論ではどのようなアプローチが考えられるのでしょうか。先ず本質論的アプローチです。人間と他の動物との比較によって、人間の本質論的な特色をはっきりさせる方法です。これが最もよく知られています。高校倫理でも教わるホモ・サピエンス(叡智人観)やホモ・ファールベル(工人観)などは本質論的な人間観です。道具使用説や言語説などもホモ・ファールベルの一種ですね。

百人百様の本質規定が考えられます。

こうした観方は、元々は動物としての人と他の動物の比較から出発して考察したものです。でもその結論が間違っている場合に、例えば言語説が間違っていて、他の動物も言語を話す動物がいくらかでもいたとしますと、この言語説に固執すれば、猿やイルカも言語を話しているから、猿やイルカも人間であることになりかねません。それでもそういう結論になったのは、言語観に間違いがあって、サルやイルカの音声的なコミュニケーションは言語ではないとすれば、猿やイルカも人間に含めることはないわけです。

この本質論的なアプローチは今後も大いに必要です。人間の特色は理性にあるというのが、ギリシア人の人間観ですが、もしそうなら人間が愚かな争いを繰り返し、破滅に向かおうとするのは何故なのだということを問い返す必要があります。脳生理学や生物学などの最新の知見を利用することも必要かもしれませんね。

また人類は環境を道具などを使って改変することによって獲得して、自分に適合させる工作人ならば、当然地球環境は改善されていくはずなのに、どうして地球環境問題がこんなに深刻化し、人類がサバイバル危機に陥っているのかを考えなければなりません。

また三木清が『パスカルにおける人間の研究』で注目した「状態としての人間」論も発展させるべきでしょう。人間は存在としては葦のようにはかない「悲惨」な存在である。しかし考えると言うことでは「偉大」である。そしてこの「悲惨」と「偉大」を揺れ動く「動性」である。というように人間の置かれている「状態性」を論じる人間論です。ここから実存主義的な人間論のアプローチが考えられますね。

梅原猛を研究していますと、感情の哲学に行き当たります。人間の哀しみや怨念、愛や憎しみというものが心の底にあって、これが衝き動かすわけです。では感情を規定しているものはなにか、人間の心の間に迫っていくというのも状態性の人間論に通じているのではないのでしょうか。

それから廣松渉を亡くしたことは大きな痛手ですが、21世紀に入って、世界を事物の運動や事物間の関係として捉える物的世界観だけでは不十分で、情報や事件の連鎖として捉える事的世界観がますます重要になってきています。事的世界観に基づく人間の生き方も人間論で追求されるで

しょう。梅原猛は次はどんな花火をあげるのか、彼はいつも人をワクワクさせていますね。私も見習いたいのですが、なにぶん非力で言ったことの十分の一も実現できない、そこが悔しいところです。

それから、これが今回問題になっているのですが、人間論の反省を通して、人間に含まれるものは何かという人間論のアプローチが重要になってきているわけです。プロタゴラスの素晴らしい人間論を素材に考えましょう。人間は、環境に適合する能力のないまま誕生した欠陥動物である。それをプロメテウス(構想力)が火と智恵を与えて、環境に適合できるようにした。しかしまだ非力なので集団生活が必要になったが、道徳性に欠けていたので、国家権力によって暴力を背景に「憤みと戒め」のないものは死刑にするとしてやっとサバイバルできるようになったとしたわけです。この人間論は現代の人間論も顔色を失うほどよくできていますが、人間が生き残る為には国家が必要不可欠とすれば、国家も含めた人間を考えなければならないのではないか、と思われまます。ホップズは、プロタゴラスを踏まえたのか、国家を巨大な人工機械人間として捉えているのです。

また人間は生産や労働に本質的な特色があります。ということは人間が生産した物によって、自己を表現して、生産物として経済的に関係しあうことになります。マルクスは商品関係を人と人の関係が物と物の関係に置き換えられる物象化として捉え返したのです。マルクスには物は定義的に人間ではないから、この置き換えには倒錯性があると考えて、フェティシズム論を展開しました。これが『資本論』における経済学批判の方法論的核心なんです。しかし生産物として関係せざるを得ないということは、生産物も含めて人間として存在していることを意味しているのではないかと捉え返せます。

マルクスは人間を「社会的諸関係のアンサンブル」として捉えましたが、それは現実的諸個人が様々な社会的な関係性を背負っているという意味なのです。しかしグラムシはこれを受けて、人間は個人として捉えられるだけではだめで、個人と組織と社会的諸事物の「歴史的ブロック」なのだとし、身体的個人にとって他在である社会的諸事物を含む人間概念の構築を「人間観の改革」として打ち出したのです。

和辻哲郎は「人間」という近代の日本語は、人

間が個人であると同時に人々として間柄であることから、人間を個人であると同時に社会であり、個人と社会の弁証法的統一であるとししました。また田辺元や三木清などは、「交渉的存在」という言葉をキーワードにして、環境を含めて人間の定在と捉え返そうとしています。

このような傾向はユクスキュルの『生物から見た世界』の影響があります。各生物にはそれぞれ固有の環境世界があるのです。それは各生物固有の諸事物から構成されています。そしてその生物は、単にその身体を解剖分析しても理解できません。固有の諸事物の連関としてのみ理解できるのです。こう考えますとダニにはダニ的事物があって、その連関がダニであるということになります。そこからダニ的事物のそれぞれがダニの定在だという理解が生じます。

これはカントの現象界の理解から由来しているわけです。ということはカント解釈として、現象世界を構成する諸事物は人間の感覚によって構成された人間的諸事物であり、その理解は広い意味で人間学であるということになります。そういうように和辻はカント哲学全体を人間学として理解しているわけです。

西田幾多郎も哲学は人間学であると言っています。「物となって考え、物となって行う」という発想があります。彼にあっては、人間はあくまで物ではなく、物はあくまで人間ではないのですが、それに止まっていたは何も出来ないで、絶対無によって絶対矛盾的自己同一的に物とならなければならないわけです。

またパースは「人間記号論」を展開し、人間を事物が他の事物を指し示す、事物の性質としての記号が人間であるとしています。つまり身体的個人を人間と捉える既成の人間論をあっさり超克しているわけです。

このような人間論の展開を総括しますと、身体的個人やそこに生じる自我を人間として捉えるだけでなく、社会的諸事物や人間環境も含めて人間として展開する人間論の可能性が大いに膨らんでいるのではないのでしょうか。

キリスト教が、ニケア公会議の決定で、「三位一体論」を採用しました。父なる神と子なる神と聖霊なる神は、ペルソナにおいては異なるが、実体においては同一だとしたのです。これに対して、全く破綻した論理だとユダヤ教徒や異教徒は呆れかえりました。キリスト教徒自身も本音では理性

的には捉えられない秘儀だと考えています。しかし日本神話もこれに似ています。太陽と太陽を祀る巫女は一体であり、アマテラスとして捉えられます。アマテラスは卑弥呼や神功皇后自身ではないかという解釈があるのです。それは無理としても、ニニギの祖母であったわけで、やはり巫女がアマテラスという太陽神なのです。太陽と巫女は全く別物でありながら一つである。嵐とスサノウ、神剣とヤマトタケルとの関係もそうですね、これは悟性では受け付けられない世界です。

でも大工は彼が建てた家屋を自分自身だと思っていますし、寿司屋は自分の握った寿司の味を自慢してこれが自分だというわけです。花火師は、自分が打ち上げる花火を自分だと思っています。身体的個人の方が人間で、彼が作り出した物は人間でないことに固執してもあまり意味のあることではないわけです。もちろん身体的な自己を見失っては困るわけで、健康に気をつけ、栄養をとって有限な生命を大切に保たなければなりません。もちろん身体的個人を人間ではないというのはいいのです。しかしそれだけを人間として捉えるのにとどまらず、社会的事物や人間環境も含めて人間を理解することも、それ以上に大切なことではないでしょうか。

もちろん個々の社会的諸事物や人間環境を、社会的連関や意識と切り離して、人間に含めても、それ自体が人格を持っているわけではありません。でも人格的意識というの、必ずしも身体だけの意識ではないのです。身体の中に人格があるというのも正確な表現ではありません。むしろ思想が表現されている事物の側にも認められるのです。意識は社会的諸事物や人間環境が生み出している面もあるわけです。個々の事物がそれだけで孤立して人間ではありませんが、個々の事物も人間的定在であるとは言えるのではないのでしょうか。つまり人間に含まれ、人間を構成しているという意味ですが。それぞれの事物が、「本」とか「パン」とか「窓」とか「パソコン」とか規定されるとき、それぞれの事物の人間性をその規定は示し

.....
 : 1月29日(土)の哲学学校で、やすいゆた
 : かに「人間観のコペルニクス的転換の冒
 : 険—21世紀の人間観の出発点に立って」と題
 : しお話をいただきます。興味を持たれた方はぜ
 : ひ奮ってご参加ください。詳しくは本誌17～
 : 18頁のお知らせをご覧ください。
 :

人生について考える (4)

西山 覚 (会員)

私はサラリーマンですが、より人生を充実したものにしたいと思っていてNGOである大阪哲学学校の運動にも参加しています。仕事をしているだけでも生活はしていけるのですがそれだけでは物足りないのです。誰にとってもかけがえのない一度限りの人生を充実したものにしたいのでこの世に生まれてきてよかったと思えるような人生にしたいのです。

ある意味でこのように仕事以外のことができるというのは私に自由時間があるからだといえると思います。自由時間については昔から「小人閑居して不善をなす」という言葉がありますが、それは時代的背景や文化の違いによって様々な形態をとると思うのです。

現在は資本主義の時代であり自由時間についても「日常世界の植民地化」という事態が指摘されていますが、これは日常生活世界においても商品・資本関係の支配が及んでいるからだと言えるでしょう。

それでは自由時間の拡張についてはそれ自体が無意味なことなのでしょうか？ これからはアソシエーションの時代です。様々なアソシエーションが進展していくにしたがって自由時間のもつ意味も変化してくるのではないのでしょうか。

アソシエーションの対等な各構成員による自発的・自主的運動が発展するにつれて自由時間のもつ意味内容がより積極的なものになってくるように思います。

私は「必然の国」から「自由の王国」へ移行する上においても自由時間の拡張はぜひとも必要だと考えています。資本主義的構成体における自由時間は対抗運動としてのアソシエーションにとっても決戦の場になると考えられます。

資本主義もグローバルに地球全体を覆い尽くすようになってきていますがそれに対する対抗運動もグローバルなものに成りつつあります。地球全体が一つの資本主義的構成体となった時に資本主義はその限界を自覚することになるでしょう。なぜなら資本主義とはあくなき欲望の拡張運動だからです。

こういったことを背景に我々個人は最も身近な日常生活世界をいきているわけです。

さしあたって最も身近な存在としては家族や会社、地域コミュニティがあります。

家族については核家族の危機が叫ばれて久しいですが、家族のしわ寄せがいきやすい子どもについては不登校やいじめやスチューデントアパシーや社会的引きこもりなどの現象が起きています。企業についても長引く不況下でのリストラや労働強化などで精神的疾患を患う人や過労死する人の増加が見られます。またこの不況下での自殺者は5年連続で3万人を突破しています。まさに日常生活世界の危機です。こういう状況下で人々の間には今まで通りの生き方ではやってはいけないという意識が蔓延しています。

こういう現象はなにも日本だけではなく世界的な現象として広まっています。資本主義の矛盾の先鋭化は混沌のなかでの新しい価値観に基づく新しい普遍的構成体への移行を我々に迫っているようです。

以上のような状況のなかで日々生活していると当然ながら私はどのようにして生きていったらいいのかという問題が出てきます。私と日常生活世界と近代世界システムとの関係、私と自然環境との関係の問題が当然出てきます。

そこで大阪哲学学校と私との関係が出てきます。もちろん独学でもある程度の勉強をすることは可能ですがコミュニケーション的行為をするためには、相互的な議論をするためには家の中に引きこもっているわけにはいかないのです。

新しい文化運動に積極的に関わっていかねばならないという思いが根底にあるのです。

新しい文化運動には当然人間の解放という課題も含まれます。

大阪哲学学校自体の規模はまだまだ小さいですが状況次第では大きく前進する可能性があるように思います。人間とはなにか、人間は何を求め、何をすることが可能なのか、ということは今/ここから出発して考えていく必要があるように思います。

池田晶子『14歳からの哲学 —考えるための教科書』が問いかけるもの

松尾 猛省（会員）

その夜スイッチをいれると、ニュースステーションに久米さんと並び池田晶子さんが映っており、その背後にはロダンの彫刻『考える人』の像がその人と重なり合うように動いていた。「14歳からの哲学」出版を機に初登場と判った。考える人、久米さんの問いかけに聞きたいこと期待したが、その人は案外寡黙にみえた。初登場のせいか、それともなにか。

本書は中学生向きとあって「君はどう思う。どう考える」調の優しい文体であるが、問いかけているものは、どうしてどうして哲学の本質を突くものだから、大人でさえ、いや
哲学者であってさえも、判然と答え得ぬものばかりである。

その項目の一は「考える」から「自分とは誰か」「死をどう考えるか」「心はどこにある」等々問いかければ、答えに窮するものもある。

いわば突きつめて「存在の謎」いわば謎が存在するから人は考え、考え続ける。謎に答えがあればそれは謎ではないのではないかと。

なるほど、謎は謎として永劫に存在する。その端的なものも死の問題、死後の世界これはどう考えても生きてある間は死がないのだから、永久の謎といえよう。

二は、家族、社会、理想と現実、恋愛と性等々日常生活の中の根源的なものに焦点をあて、三は、17歳からの哲学として宇宙と科学、歴史と人類をふりかえり、善悪、自由、宗教をポイントに考察して後、人生の意味を問い最後に存在の謎にせまる。

読みながらもの思い、もの思いながら読むというかたちで一読したわけだが、語り口のやわらかさは素直に中学生の胸にとどいても、いざそれを自分でどう思い考えるのかとなると中学生ではいや、大人でさえ答えることには容易でないことがわかる。

この本にはいかなる答えも書いていない。答え

なんかないのだから、書くことはできない。君は肩すかしを食らったと思うだろうが、それこそが始まりなんだ。何故って、君はわからないという事がわかったのだからだ。「読む」と言うことがそれ自体が「考える」ということなんだ。本を読むということは、わからないということと共に考えていくことなんだと。

その意味では教科書となずけたが、その意味で答えはなく、考えることの問いかけであると。また、答えは書いてなくとも、問いの考え方は書いてあるかもしれない。でも、それを使って実際に考えるのは君でしかない。泳ぎ方の知識を本でわかったって、実際に泳げなければ、泳ぎを覚えたことにはならないと同じだ。それが頭だけの知識だったら溺れてしまうこと明らかだ。さあ、君はこの本で考え方を覚えて、実際にこの人生を溺れずに渡っていくことができるだろうか。深い水の中、生きるか死ぬかの場面で、力強く泳いでいくことができるだろうか。

本書の全頁にわたり著者のこの考え方が浸透していて、読むものをして感乱させる。それはまた、あたりまえのこととして見過ごすものを、はたと立ちとどませるかもしれない。

哲学とはそういうものだ。なるほどそういうものか。もう少しポイントをわたしなりに整理してみよう。

「頭でわかるだけの知識、借り物だけのだけの知識なんかに、どうしてひとりの人間の人生を変えてしまう力があるだろうか。君は、自分が生きて死ぬということがどういうことなのか、さっぱり分からないということが、はっきりわかるだろうか。なぜなら「考える」とはその謎を考えることに他ならないから。君は自分が生きて死ぬということがどういうことなのか。さっぱりわからないということがはっきりわかるだろうか。」

「わからないとわかるからこそ、考えるんだ。考

えたってわからないと考えないのは、わかっていないということをつかっているからでしかない。わからないとわかっていることを考えるのだから、それは答えを求めることじゃない。もし君がこれからの人生で、本当の学問を志すならこのことわかっておくがいい。考えるということは答えを求めることではない。考えるということは、答えがないということを知って、人が問いそのものと化すことだ。どうしてか。それは謎が存在するからだ。謎が謎として存在するから、人は考える。考え続けることになるんだ。よく考えたまえ。謎に答えがあったら、それは謎じゃないではないか」(傍線は筆者)

本書をひもといて以来、遅らばせながら図書館で他の既刊本を憑かれるように読んだ。読みながらわくわくと、不思議な胸の高鳴りと共鳴、かって今までの哲学者の本を読む知覚とは異質な感懐、ことに「悪妻に訊け」<帰ってきたソクラテス>は著者の抱くソクラテス像のフレキシブルな虚構の対話を思いこみも錯綜のなか愉しく読んだ。数々の既刊は「新潮45」や週刊誌、出版社のPR誌に連載されたとあって、不覚にもわたしは一ページもめくっていない、知らぬものを読めるはずないというもの。図書館でひたひた読み漁るうちに梅田のA書店ではTVのせいか、彼女の本が哲学コーナーに既刊数冊が山積みされていた。

私は未読の「ロゴスに訊け」を買い求めページを繰るうちに、意外なことに気づく。「ネットの言葉に自由はない」のなかで彼女は述べている。

…月刊誌、週刊誌に連載中も、それが一冊の本になったあとも論壇や書評でまともに取り上げられたことが15年間未だにない。僻んでいるのではない。我ながら大したものだとおもうのである。と。

別にとり上げられなくても、価値のあるものは自然と読者層を増やしていくものと思うが、なんともこれはこれで出版界の珍現象ともいえるものではないのかと、思いながらも私はわたしでこれはなんとしても腑におちない現象といわねばならない。

書評のつもりでペンを取ったが、用をなしたかどうか。紙数もあるのでこの辺で置くが、「オン！」—埴谷雄高との対話、50歳下の若き女性哲学者との10年来の交流の中に見るメタフィジカルな対話を読むにつれ、時を忘れて語る二人の言葉の背後に50年の歳月の果てに未完の「死霊」と埴谷の超人的な憑き物への執着、それがいったい何であったのか。容易ならざることとはいえ、その謎を「存在の謎」に挑む若き哲学者、池田晶子にほのかに期して拙稿を擱きたい。



大阪哲学学校活動年譜 (通信) (ソクラテス以降)

- 2003. 7.26. 「大阪哲学学校通信」第25号発行
- 7.26. 「日常生活世界の哲学のために」第4回「人間の死と〈スピリチュアリティ〉」
.....講師・平等文博
- 8.30. 夏期合宿(大阪唯研哲学部会、「季報・唯研」刊行会との共催)於・信貴山玉蔵院
- ～31. 1日目 研究発表: 室伏志畔、木村倫幸/交流会 ※合宿詳細は本誌3頁を参照
- 2日目 ヨーガ: 伊元勇 報告・研究発表: 大嶋朝香、服部健二、小坂育子
- 9.13. 「解放教育への私の歩みと教育の現状」.....講師・石塚 健
- 9.27. 「授業を楽しむ子どもたち—中学校の現場から」.....講師・角 伸夫
- 10.11. 「現代日本の文学と文学運動の現状」.....講師・吉田永宏
- 10.25. 「山本晴義『対話・現代アメリカの社会思想』出版記念会&祝賀会」
記念講演・山本晴義、コメント・木村倫幸、やすいゆたか、田畑 稔
- 11. 1. 大阪哲学学校2003年度総会
- 11.15. 「メディア事件史—メディアにいま何が問われているか」.....講師・小嶋康正

うれしい言葉

義積 弘幸 (会員)

日本の古典『古今和歌集・仮名序』(岩波・大系本)において、紀貫之は《やまとうたは、ひとのこころをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりぬ》と記している。

なぜ、このような言葉から、この文を始めるかという、「哲学学校通信」を読んでいて、ふと、この言葉が思い浮かんだからである。

「哲学学校通信」には、それぞれ個性的な文章が、一定の〈イデオロギー〉に収斂することもなく(注1)、対立(コントラスト)はあっても、まさに民主主義的に並んでいるからである。

(注1)

国家イデオロギーの終焉がいかに醜いものであるかは、元ルーマニア大統領チャウチェスクの死ぬ間際の映像が明らかにしている。

そして、紀貫之の考えに戻ると和歌は《ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、おとこ女をもやはらげ、たけきものふのこころをも、なぐさむるは歌なり。》とも言っている。ここでおそらく、こんな問いも出てくるだろう。「なに、和歌が、天地を動かすだ?」。これに対して、貫之の真意を思えばかると「人の心を動かす力をもっているのが和歌なら、どうして天地を動かす力をもっていないだろうか。きっと、もっているはずだ……。」その後の記述はその信念から来ていると思われる。

今は、地球上の各地で(特に中東)で地域紛争が繰り返されている。私は、そのような暗い世相から目をそらすようにして、「今年最も注目する人」として「小澤征爾」を選んだわけだが、「25号」の文章で述べたように、それは当たっていたわけだ。(注2)

それもうれしかったのだが、本当のうれしさは、私は「通信22号」の拙稿の最後に述べた、このままでいけば、「哲学学校」が典型的な〈男性社会〉の集団になってしまう、〈もっと女性の出席を! 女性会員の加入を!〉という呼びかけが、かなったからだ。そして、その女性たちの文章が、しっ

かりとした経験に裏打ちされたものであったからである。

その一人、川口敦子さんの文章の核心は、《人間あまりにも過酷な状況に直面すると、シャッターをおろしてしまわなければ、やって行けないというのも事実です。それもしかたがないことだと思いますが、「愛知者」として目をそらさず、耳を塞がず、考えてることをやめずにより続けたいと思います。》というところであると考えます。特に良いと思うのは、自らを「哲学者」と言わず「愛知者」と書かれているところ、まさに同感という他ない。また、通信教育の学生を7年も続け、今は最後の論文の〈出産〉の苦しみを必死に耐えているところ、尊敬に値する。「学問は年月永く(なが)励み務むるぞ肝要」(本居宣長)なのだから、きっと花開く日が来るであろう。できれば「哲学学校」で一緒に学び合いたいものである。

次に、小野佐知子さんの文章の核心は、《キリスト教以後は理性を重んじ感性を軽んじてきたが、それ以前のギリシャ哲学では感性は重んじられていた事、また歴史哲学はかつて一度も美という観点を導入したことはないが、プラトンは時間の世界と永遠の世界の通路は思考ではなく美によるとした事から、美の観点を持つ歴史哲学があっても良いのではないか》というところだと思う。

これは、ある意味では、西洋観念論哲学の大成者ヘーゲルへの批判であり、カントの『判断力批判』の再吟味を迫っているようにも見える。また、私が「小澤征爾」を取り上げたのも、多少そのような意味をもっていたかもしれない。音楽は、まさに〈美〉だから。

けれども、人間における理性と感性の対立が、はっきりと分けられるのかという疑念もある以上、さらに一考に価するといえなくもない。

さらに、別に小野さんが取り上げた「老子」という存在も私にとって見逃せない人物である。中国古代、諸子百家の一人。「莊子」とともに並び称される老莊思想の一方として、特に、孔子や孟子の流れをくむ儒家と徹底的に対立した人物。そ

れを単に古いと言って見過ごしていいのだろうか。

時は春秋戦国時代。中国四千年の中でも、最も、世の乱れた時代の一つ。性善説という〈哲学〉においての根本的な論争がなされた時代。私は、この時代の研究が全く無駄であるとは思えない。私に体が二つあれば、或いは、もっと若ければ、ぜひ取り上げたいテーマの一つである。なぜなら、これも〈倫理〉を考えるうえにも重要だから。また、私が『季報・唯物論研究』に二度、『論語』小論を書いた時、「老子」や「莊子」についてももう一度考えてみるのもよいだろうと大学の恩師にアドバイスを受けたこともある。そんないきさつもあり、「老子」にひかれる小野さんの気持ちもよくわかる気がするのだ。

東欧、ソ連の社会主義崩壊には、あまり、ぐらつくことがなかった私も、近代中国の大きな揺れ—中華人民共和国の建国からプロレタリア文化大革命を経ての経済の資本主義化—には迷走も決して対岸の火事とも思えないのである。それほど

東アジアにおいては現代中国の行くえは、重要な意味をもっているといえるだろう。

(2003・10・11)

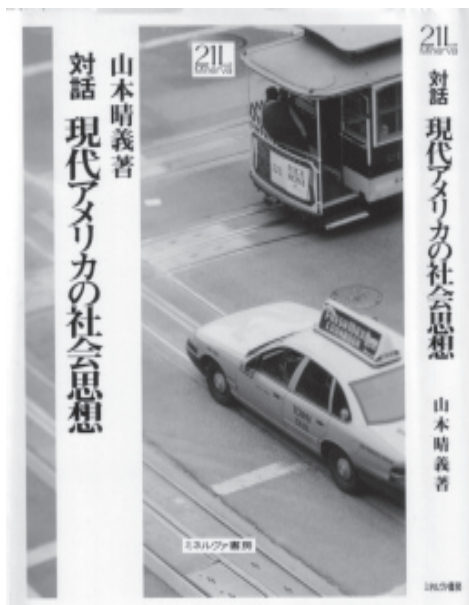
(注2)

先に依然として、私は「小澤征爾」の今後にも注目していると述べた。そのような時、次のような新聞記事を読んだので、次にそれを引用しておく。(「朝日新聞」2003年8月2日付。「シアター03」より)

育て！世界に通じる指揮者／オザワに学ぶ「音楽セミナー2003」京都で開催

《世界のオザワに続け・・・7月20日から26日まで京都市内で開かれた「ロームミュージックファンデーション音楽セミナー2003」指揮クラスにウィーン国立歌劇場の音楽監督・小沢征爾が講師として登場した。小沢が日本で本格的に指揮を教えるのは初めて。盟友の湯浅勇治らと共に、華麗な指揮棒さばきも見せながら9人の受講生を生き生きちお指導した。》(佐藤千晴)

『対話・現代アメリカの社会思想』 割引価格にて購読いただけます！



山本晴義校長の新著(2003年11月刊、ミネルヴァ書房)を、著者のご好意により定価2800円(税込2940円)のところ、税込2500円の割引価格にて頒布いたします。

購読ご希望の方は、哲学学校催しにお出でください。郵送をご希望の方は哲学学校までご連絡ください。郵送料実費290円は別途ご負担願います。ただし、3冊以上まとめてご購入の場合は、送料を当方で負担いたします。

〈同書目次〉

プロローグ／Ⅰ.戦後「アメリカ・リベラリズム」の発展／Ⅱ.60年代「アメリカ・リベラリズム」の崩壊とニューレフト／Ⅲ.80年代アメリカ「新保守主義」の台頭／Ⅳ.80年代アメリカの「左翼」／Ⅴ.グローバリゼーションとポストコロニアリズム／エピローグ 9・11と今後の課題

Poème

船曳 秀隆(参加者)

真空欲

何より僕を何でもない宇宙は変えはしない
宇宙のフーリングを べるゆべ べるゆべ
広さを確かめて去り始める

季節に細い蛇が
有限の杯をじよろり じよろりと
蠢いている

あらゆるあなたはあらゆる宇宙を変えてしまった
満月が切ない靴を換えるように
浸蝕リズムを捕りながら
蛇足する靴下を履く

僕が
宇宙のドライヤー びゅらる びゅらる
濃さを見つけて知りつつける

浮ついた風の
真空大蛇が
無限のアイロンを じよろり じよろりと
這い回る

宇宙はあなたをあらゆる人に変えていった
湖がベルトを脱がすように
ステップを踏みながら
腰抜けの色パンツを巻く

何より僕を何でもない宇宙は変えはしない
真空宇宙のフーリングを びゅらる びゅらる
広さを確かめて去り始める

僕が
宇宙のカーテンを さりり さりりと
高さを忘れて過ごしている

何より僕を何でもない宇宙は変えはしない

宇宙の蒲団を宇宙のドライヤー
宇宙のホッチキス
木が

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心・立場からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営しておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近はこちらのようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。(※各連絡先は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい)

- 『道路公害から生活をまもる みちしるべ』第25号、阪神間道路問題ネットワーク発行
「原爆の日に思う」(砂場 徹…本校会員)ほか掲載
- 『ニュース・アソシエティブ』第205号、第206号、経済研究会発行
「破綻するアメリカのイラク中東政策」「小泉再選と今後の日本」ほか掲載
- 『季報・唯物論研究』第85号、季報『唯物論研究』刊行会発行
「21世紀歴史世界のマクロ認識にむけて」(田畑稔…本校参与)ほか掲載

森田療法と西田哲学について

— 純粹経験と「そのまま」の概念 (3) —

松尾 猛省 (会員)

わたしが西田哲学に関心をもったのは高校時代の恩師の影響もあった。卒業後の交流のなか、西田に傾倒していた師は「絶対矛盾の自己同一」について世界はひとつである、ひとつでありながら多くの国家をつつんでいる、即ち世界は多である。一即多、多即一つまり一と多は絶対矛盾でありながら世界の中につつまれる。即ち、絶対矛盾の自己同一ということになると文通でしたためていた。

西田は述べている。哲学は我々の自己矛盾より始まる。深い人生の悲哀、我々がこれにおいて生まれ、働き、死にゆく世界とは如何なるものであるか。我々の最も平凡な日常の生活がなんであるかを、深くつかむことによって最も深い哲学が生まれるのであると。

その思いに浸るうちに、甦るのがあの倉田百三の「愛と認識との出発」で〈見よ！個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのであり個人的区別よりも経験が根本的であるという考えから唯我論を脱することができた〉倉田のその後の言葉が印象的である。

〈自己の個人意識について、自己がまず存在して経験はその後に生ずるものと思っていたが、この認識論は全くの誤謬であった。実在の最も原始的なる状態は個人意識ではない。それは独立自全なる自然現象である。我とか他とかいう意識のないただひとつのザインである。ただ一つの現実、光景で、純一なる経験の自発自転である。主観でも客観でもないただ一つの絶対である。〉この概念をつきつめると西田哲学のそのままにつながるようにおもえる。

それではこの倉田の思念、感懐を念頭に西田の純粹経験に眼を向けることにしたい。

純粹経験とは

経験するというのは、事実そのままに知るの意である。「善の研究」の冒頭の言葉である。まったく自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。また、純粹というのは、普通に経験といっ

ている者もその実は何らかの思想を交えているから、豪も思慮分別を加えない、真に経験そのまゝの状態をいうのである。

そして、例えば、色をみ、音を聞く刹那、いまだこれが外物の作用とか、我がこれを感じているとかの考えのないのみならず、この色、この音はなんであるかの判断すら加わらない前をいうのである。それで純粹経験は直接経験と同一である。

自己の意識状態を直下に経験したとき、いまだ主もなく、客もない知識とその対象とが全く合一している、これが経験の最醇なるものである。

このくだりを読み思った。経験そのものを理論、理屈で説明して果たして理解しえるものなのか。私は私なりの感覚で西田の純粹経験の理論を理解もするが、それはなにがしの経験あってはじめて知ることができえるものではないだろうか。

そんなことを考えていると、養老孟司氏が「バカの壁」の冒頭でいっていたことを思いだした。〈ものがわかるわからぬの怖さがわかっていない。知識と常識の違い、聞けばわかる、話せば判ると思っているが、それを陣痛の痛みにたとえ、女性は体験できるが体験できない男性が如何に陣痛の痛みを説明しても分かりっこない。なんでも簡単に「説明」さえすれば、全てがわかると思うのは、どこかおかしい、ということがわかっていない。〉傾聴の言葉と思った。

さて、森田療法の本題にもかかわることだが、強いていえばこの純粹経験そのものを体験、経験すれば「そのまま」の概念も自ずから理解できるのでないだろうか。

私の体験でいえば、療養中美術館へ行き、ビュッフェの絵に見とれていた。

後に感じたことであるが、その見とれている状態というもの、主もなく客もない、私が絵を見ているという感覚も、私が病院を抜け出しここに絵をみに来ている思いも、私の病のことも何もかも忘れてただ一枚の絵とわたしが完全にひとつになっている。これこそ純粹経験であり、森田のい

う「そのまま」の概念ではないのかと。

我々は少しの思想を交えず、主客未分の状態に注意を転じていくことができる、その例が――生懸命に断崖をよじる場合の如き、音楽家が熟練した曲を奏するが如く、また動物の本能的行為にも必ずかくの如き精神状態がともなっていると。また、表象の体系が自ら発展する時、全体が純粹経験であり、ゲーテが夢の中で直覚的に詩を作ったのもその一例である。

西田は様々な例証をあげ、純粹経験を説明しているが、我々はそれをわれわれの日常生活の中に思い浮かべるのである。

クラシックファンなら思い浮かべることだろう。あのベートベンの第五のドラムを叩く音に身も心も奪はれ陶酔状態の時、まさにそれが純粹経験であり、直接経験といえよう。

また、こんなこともいえよう。野球ファンなら誰しも願うあのホームランも形態的に一種の純粹経験の状態ではないのかと。

選手なら誰しも打ちたいと思うが、あれは打ちたいと思って打てるものでないことは、大方の現役選手、解説者の提言である。にもかかわらず、打つものは打つ。

端的に言って、ホームランも主客一体の産物、主もなく、客もなく、打とうと思う心もなく、バットを振る瞬間に球の中心とバットのヘッドがあたり、命中した球は弧を描き、観覧席に飛び込む。まさに主客一体の瞬時の産物である。

それはまた、熟練、熟達の境地である赤バットの川上哲治だったか、ホームラン量産の秘訣を尋ねたとき、川上は「球が止まって見えた」といった。まさに驚くべきセリフである。あの時速150キロの剛速球が止まって見えるというのだから、部外者、現役選手も返す言葉もなかったのかもしれない。主もなく客もないある一瞬に動が静に変じる眼力、熟達の境地の恐ろしさを感じるのである。

文献をあさるうちに『とらわれからの解脱』（宇佐晋一・木下勇作共著、91年発行）を見た。宇佐晋一氏は三聖病院の院長で私もお世話になった師である。木下氏は日本経済新聞の社員で同じく同院で宇佐院長より教導されたとある。

本書には森田療法と禅、森田療法の元祖森田正馬や宇佐晋一の父玄雄についても述べているが、それによれば森田正馬、ユングにしても神経症の葛藤を経験しており、正馬の弟子玄雄にしてもひどい神経症の葛藤を経験済みで、既に僧籍であっ

た彼が精神医学の道を志し慈恵医大へと進み後に現医院建設へと進んでいる。これをみると正に経験あって個人あるのであるといきった西田の言葉の実証を見る思いもする。

宇佐氏は「西田幾多郎と純な心」と題して、西田哲学の元になる重要な立場は「純粹経験」であるが、これを読むうちにあたかも森田先生の本に接している錯覚を覚えるのでないかと、純粹経験を「純な心」に置き換えれば、森田療法をすんなり受け入れられるようである。森田先生の本棚に「禅の研究」があったことも入院患者の日記にもあり、森田自身もこれについて語られたことがあると。これをみても西田哲学が森田に与えた影響力の大きさが伺えるのである。

いろいろ文献をあさるうちに、鈴木亨著『西田幾多郎の世界』を読み、鈴木氏は「我々の最も平凡な日常の生活がなんであるかを深くつかむことにより、最も深い哲学が生まれるのである」西田の言説にいきつき、彼の哲学が如何に実生活に深いかわりをもっていたかをわかるのであるが、その論法、方法が包括的な学説と述べているが、まさしく純粹経験説が森田療法の基調となり、磐石となっている上においても明らかである。（下線は筆者）

先にみたごとく、森田療法は西田の純粹経験つまりくだいていえば「そのまま」の概念が基調となっていて、つきつめれば「ありのまま」につながっていく。それはどういうことなのか。自分が苦しくて普段の日常生活ができないから、病を癒しに来ているのに、そのまま良いとは、当事者にとっては正に雲をつかむ如く、最初とはまどう。

本療法以外の治療は殆ど薬物をほどこすが、本院では神経症の治療には薬物は一切使用しないことになっている。その根底には神経症は病であって病でないという見方のうえの対処療法であるからである。

心の病の根源は「捉われの心」である。その捉われの心と自分で対決しようとするから、ますます捉われからの葛藤がおきて、にっちもさっちもいなくなる。心は自分自身で制御、コントロールできないものと自覚することによって、ほったらかす、放任する。それが西田のいう「純粹経験」であり、「そのまま」であり、そのままは「あるがまま」に結びついていく。心に起きる様々な現象に対して小細工せず、そのままにして日常生活の必要事をこなしていく。絶対矛盾の自己同一で

ある。その作用が働く。そのままのあなた任せである。森田療法では心の中になにがおきても、それに目を向けず「そのまま前進」あるのみと教導される。捉われの心を自分が見詰める心の余裕をもつ、今とらわれているなという感覚、北丈夫だったかが「鬱がきたな」という感覚である。はじめは意味もわからず苦しむがそれを知らずのうちに自覚することにより、神経症の苦しみからも脱していくことができるのである。療養者にとりやさしい道のりともいえないかもしれないが、自覚と

実践により克服すれば望外の歓喜である。

心の状態は日々の天候と同じで天気のうち雨もあれば、雪も降り曇もあれば山嵐もふく。

だが、年中というわけでもない。心の状態も一緒だ。快晴のうち曇り、雨また上る。ただ眺めておればよい。この理屈が心身共にわかれば、森田療法も卒業である。

お知らせのページ

★大阪哲学学校2003年度総会を開催

2003年11月1日(土)午後3時30分～5時30分、尼崎労働福祉会館会議室において、会員11名の出席と17名の委任状参加により標記総会をもちました。総会では、運営委員会が提出した議案に沿って審議をおこない、議案の一部修正による承認と次期運営委員の選出をして終わりました。会員の皆さまには、別途より詳しい総会報告をお渡します。

★哲学学校の連絡先変更

哲学学校は規約で所在地を運営委員長宅としておりますが、平等の転居にともない所在地(連絡先)を11月20日より以下のように変更いたします。

〒657-0037 神戸市灘区備後町5-3-1-1001 tel&fax 078-856-2474

★独自ドメインの取得と新しいホームページの立ち上げ

以前契約していたプロバイダの事業からの撤退にともなって、ながらく公式ホームページが閉じられていましたが、このたび哲学学校独自のドメインを取得して、12月1日から新たにホームページを立ち上げることになりました。URLとメールアドレスは次の通りです。

URL <http://www.oisp.jp> メールアドレス contact@oisp.jp

※「oisp」は「Osaka Independent School of Philosophy」の略号です

独自ドメインならではのさまざまな機能を利用して、ホームページのこれまでにない活用ができるものと担当の伊元委員が現在構築中ですので、どうぞご期待ください。なお、11月末までのメールによる連絡は従来通りbyodo@portnet.ne.jpまでお願いします。

★これからの予定

これからの哲学学校催しの予定は次の通りです。ぜひ奮ってご参加下さい。場所はいずれも尼崎労働福祉会館(阪神尼崎下車、駅西の南北道路を北へ徒歩10分)です。

●11月29日(土) 午後1時30分～5時30分(1/17を除き以下同じ)

「人間観のコペルニクス的転換の冒険—21世紀の人間論の出発点に立って」

講師・やすいゆたかさん(立命館大学ほか講師、著述業、哲学学校会員)

【講師より】

《話の順序》

手塚治虫『鳥人大系』—鳥が人間でもいいのか。自己意識のある理性的動物としての人間。

手塚治虫『鉄腕アトム』—ロボットが人間でもいいのか。自己意識ある理性的存在としての人間。

【次ページに続く】

デカルトvsホッブズ—動物機械論vs人間機械論。人間は神(自然)が造ったロボットか。

人間の本質は一つか—百人百様の人間規定の統合—人間論の大樹

「状態性しての人間」論から「カテゴリーとしての人間」論へ—交渉的存在論と環境世界論を踏まえて—

『資本論』の人間観の限界から『人間観の転換』へ—人間が商品であるだけでなく、商品が人間である—主体概念の脱構築、身体だけでなく事物や社会も考えるということ。

パース「人間記号論」—人間は記号であり、記号は事物が他の事物を指し示す事物の属性である。

人間論の活性化の為に—事的人間論の可能性、各人間論の現代的意義の再発見、西田幾多郎が「哲学は人間学である」という意味

《話のポイント》

「おとめの床の辺にわが置きし剣が太刀、その太刀はや」ヤマトタケルは草薙剣の化身である。人間は個的身体であるだけでなく、社会関係であり、その中での諸事物や環境世界としても定在する。主体としての人間性の回復を個人の身体性の限界に止めるのではなく、組織や諸事物を包摂した人間概念への転換によって試みようとする人間観のコペルニクスの転換の冒険。

- 12月14日(日) ※講師のご都合により日曜日の開催ですのでご注意ください。

哲学史読書会「ヘラクレイトスを読む」

講師・永野春男さん(大阪工業大学講師)

※テキストは『初期ギリシャ哲学者断片集』(岩波書店)所収のヘラクレイトスの文章を用いることになるとは思いますが、参加者にはコピーで資料をご用意します。

- 2004年1月17日(土)

「新年・会員参加者交流会」

※恒例になりました交流会、毎年飲食(飲める人はアルコールも)をともにしながら現下の情勢や各自が取り組んでいるテーマ、新年の抱負など、大いに語り合う年に一度の機会です。会員非会員を問わず、ぜひ多数ご参加ください。なお、時間帯や参加費が通常と異なりますので別途ご案内します。新しいホームページにも掲載しますのでご覧下さい。

- 1月31日(土)

「近年の社会福祉のトレンドとその歴史的意味」(仮題)

講師・大野光彦さん(皇学館大学地域福祉文化研究所長・教授)

★「通信」第27号の原稿募集

次号「大阪哲学学校通信」通信の原稿を募集しています。会員交流誌という本誌の性格からも、できるだけ多くの会員・参加者の皆さんに投稿いただきたいと願っています。生活の現場で考えたこと、関心をもっている問題、最近読んで刺激を受けた本の紹介など、テーマやジャンルは問いませんので、気軽にご投稿ください。字数も自由ですが、400字×15枚を超える原稿については分載などの措置を取らせていただく場合がありますので予めご了承ください。

★年末抛金(カンパ)のお願い

哲学学校の活動は、会員・参加者の年会費と参加費そして運営委員を始めとする方々の自発的な労力提供によって支えられています。おかげさまで、今のところ大きな赤字を出すことなく比較的健全な財政運営が維持できています。しかし、昨今の催し参加者の減少により、催し単位の収支は毎回赤字が続いています。その損失分を年会費と抛金の収入によって埋めているのが現状です。現在の厳しい経済状況は会員の皆さまをも直撃していると思いますので心苦しいお願いですが、もし可能であれば年末カンパにご協力いただければ有り難く存じます。抛金は一口千円で何口でも(端数可)結構です。郵便振替01170-1-81313「大阪哲学学校」までよろしく申し上げます。

大阪哲学学校暫定規約

(2003年11月1日改訂発効)

(前文)

大阪哲学学校は1986年に大阪唯物論研究会哲学部会によって設立され同研究会の指導ならびに同会の季報『唯物論研究』(現在は刊行会として独立)との連携のもと、百数十回におよぶ講座・読書会・シンポジウム、2回の海外研修旅行を主催したほか、「天皇制」「企業モラル」「日本の保守」をテーマとした共同研究を組織し大阪哲学学校編著として出版した。

そうした活動の中で蓄積されてきた会員の能動的なエネルギーを、哲学学校の企画・運営の担い手としても活かし、本校と会員双方がさらに成長・発展するため、このたび大阪哲学学校を会員が自立的に運営する文化団体として再出発させることとなった。

しかし、これまでの経緯ならびに活動の実態を考慮し、大阪唯物論研究会哲学部会ならびに季報『唯物論研究』刊行会とは今後も友好協力団体として相互に支援しあい、本校設立以来その活動を支えてきたスタッフも引き続き全面協力することを確認しつつ、会員自治による新しい学校運営をスタートさせることとする。したがって本規約は、会員自治が順調に機能し、本校が活動の自立的再生産を果たせるようになるまでの暫定的なものである。

第1条(名称)

本校は、「大阪哲学学校」と称する。

第2条(所在地)

本校の所在地(連絡先)は、当面、運営委員長宅とする。

第3条(目的)

本校は、広く市民に開かれた哲学研究の場、哲学的「対話」の場である。

本校は、「生活と哲学の結合」をめざし、哲学の立場から生活をまた生活の立場から哲学を吟味することを通して、「哲学する」ことを学ぶ場である。

第4条(活動)

本校は、講座・講演会・読書会・シンポジウム・見学会・研修旅行など、「生活現場と哲学の接点」となるべきさまざまな催しならびに研究活動を企画し行う。また催しの連絡をするために「大阪哲学学校だより」(以下「たより」)を、会員相互のコミュニケーションを主たる目的として「大阪哲学学校通信」(以下「通信」)を適宜発行する。

2 「たより」の送付は電子メールを原則とし、不可能な場合は郵送する。「通信」の発行については、別にガイドラインを設ける。

第5条(会員)

会員には、本校の主旨に賛同し参加の意思を有する以外、いかなる資格制限も設けない。

2 入会希望者は、入会金ならびに年会費をそえて運営委員会に申し出る。ただし、元会員の再入会については入会金を免除することができる。

3 退会は自由であり、運営委員会にその意志を表明した時点で退会したものとみなす。ただし、会員としての権利や特典にまだ一度も与っていない場合をのぞき、すでに納入した年会費等は返却しない。

4 会員は「一般会員」と維持会費により本校を経済的に支援する「維持会員」とからなる。

いずれの会員となるかは申し出による。会員は「たより」と「通信」の送付を受けるほか、催しの録音テープを借り出すことができる(有料)。

5 「一般会員」は、本校の主催する催しへの参加時に規定の参加費を、「維持会員」はその半額を支払う。

6 会員以外の誰でも、本校の催しへは規定の参加費を支払って自由に参加できる。

7 入会金、年会費、参加費の額は会の財政状態や物価の動向などを考慮し、総会によって定めること

とする(註1)。なお、会員の事情に応じて会費の割引、分割納入など考慮する。

第6条(総会)

毎年1回定期総会を行う。総会は運営委員会が招集する。総会は本校の最高の意思決定機関であり、すべての会員が議決権を有する。総会は①前年度の活動総括、②年間基本方針の決定、③運営委員長および運営委員の選出、④校長、参与の委嘱、⑤会計報告の承認、⑥規約の改廃等を行う。必要に応じて臨時総会を行うことができる。また会員の3分の1以上の要請があれば運営委員会は臨時総会を招集せねばならない。

第7条(運営委員会)

運営委員会は、総会で選出された運営委員長1名、運営委員若干名ならびに参与によって構成され(註2)、総会決定に基づいて日常的に本校を運営するとともに、次期総会までに総会に代わって諸決定を行う。運営委員会は総会を招集し、議案を提出する。運営委員長ならびに運営委員の任期は1年とし、再任は妨げない。運営委員は委員会の決定に基づいて本校の日常業務を分担して執行する。各委員は必要に応じて業務の一部を会員に委託することができる。運営委員長は委員会を招集・主宰して各委員の活動を調整するとともに、運営全体の責任を担う。運営委員会の開催は当面不定期とするが、運営委員の半数以上の要請があれば運営委員長は委員会を招集しなければならない。また企画等の重要な決定に際しては、会員からの意見を聴取するための拡大運営委員会を開くことができる。運営委員会は民主主義の一般ルールに基づき運営される。

第8条(校長、参与)

本校の代表者である「校長」1名を総会で適任者に委嘱する。また「参与」若干名を、同様に総会で委嘱することができ、「校長」は「参与」を兼ねるものとする。なお、「参与」は本校の活動全般について助言・協力することを任とし、運営委員会での議決権を有する。

付則 本暫定規約は、1995年9月17日の大阪哲学学校1995年度総会における決定により発効する。

2 本暫定規約は、1996年9月28日に開かれた大阪哲学学校1996年度総会での決定により改訂発効する。

3 本暫定規約は、2003年11月1日に開かれた大阪哲学学校2003年度総会での決定により改訂発効する。

註の事項について、2003年度は次の通りとすることを総会で確認した。

〈註1〉 ※現行通り

入会金：一般会員千円、維持会員二千円

年会費：一般会員二千円、維持会員五千円

参加費：一般会員・非会員千円、維持会員五百円

〈註2〉

校長(兼参与)：山本晴義(大阪経済大学名誉教授)、参与：木村倫幸(奈良工業高等専門学校教授)、笹田利光(園田学園女子大学教授)、田畑 稔(大阪経済大学教授)

運営委員：伊元 勇、中村 徹、西山 覚、橋本直樹、平等文博(委員長)、松尾猛省、山口 協

■ ※運営事務の滞りから、会員登録更新のお知らせをしていなかったため、ご存知ないまま登録期限が切れてしまっている会員の方が多数おられます。不手際をお詫びするとともに、改めて該当者にはお知らせいたしますので、ぜひ登録を更新いただきますようよろしくお願いいたします。